

## 郡市等医師会だより



## 国東市医師会

国東市医師会

帯刀真也

国東市医師会は現在、A会員17名、B会員16名、老会員1名の34名です。病院が3施設、有床診療所が6施設、無床診療所が10施設あります。

自分は生まれ育った国東市武蔵町に開業してもうすぐ11年になります。医師会の先生や地域の方に支えて頂き、眼科診療を行っています。

2020年4月に武蔵町内の3つの小中学校が併合し小中一貫校として志成学園が開校しました。これで自分の母校（武蔵東小学校、武蔵中学校、国東高等学校）は全て合併してしまいました。合併すると校歌が変わってしまいます。校歌を懐かしく思っていたのですが、自分の知っている校歌が無くなるのは寂しいものです。

医師会活動では菅会長のもと副会長を務めさせて頂いています。会長を支えると言うよりは会長をはじめ医師会の先生方に支えて頂いている状況です。今後は少しでも役に立てるよう頑張りたいと思います。

小さな医師会ですが会員はもちろん周辺医師会ともしっかりと協力、連携しながら、国東市の医療を支え守っていきたいと思います。

今後ともよろしくお願い致します。

## 郡市等医師会だより



## 国東半島北部より

豊後高田市医師会

宮内和誠

皆様、コロナ禍が続く中いかがお過ごしでしょうか？

豊後高田市香々地地区にあるサンクリニック及び介護老人保健施設サングレイス香々地の管理者をしております、宮内和誠と申します。

昨年度は、新型コロナウイルスに始まり終わった年となりました。今年に入っても連日、新聞やテレビ番組で放映されるのはこの話題ばかりですね。

クリニックの景色も、新型コロナウイルス対策で様変わりしました。発熱者や感冒様症状者の診察は自家用車の中や新設した発熱者専用の診察室で完全防備でとなりました。

午後3時頃になると、診療所待合室にあるテレビからニュース速報として流れる県内の感染者数速報に聞き耳をたて、その後大分県のホームページで、PCR等検査実施人数及び患者状況をチェックする事が日課のようになってきている今日この頃です。

今回、豊後高田市医師会より執筆の依頼を受け、何を書こうかと迷いましたが、私の勤務地である香々地町につき少々御紹介できればと思います。

香々地町は、豊後高田市より北東へ車で30分程向かった先にあります。周囲人口は3000名を切る、過疎及び高齢化が進んだ地域です。

県内とは言え、訪れた事のある先生方は少ないかもしれません。

馴染みがあるといえば、香々地少年自然の家でしょうか？皆様もしくは御子息が、小学生や中学生の時に宿泊研修に来られた事があるかなと思います。

プラネタリウムを併設した山と海に囲まれた自然環境が豊かな施設です。少年自然の家から海を挟んだ向かいには、キャンプや海水浴が楽しめ、春～夏にかけては菜の花や向日葵の群生が圧巻な長崎鼻をみる事ができます。訪問診療の帰り道に、長崎鼻の景色を見たり、小中学生が集団でレクレーションを楽しんでいる声を聞く事が密かな楽しみとなっております。

また、山側には、国の名勝及び国立公園にもなっている、中山仙境も有しています。修行場である、「天空に架かる無明橋」は一度見ておくとよいかもしれません。

渡ってみてもいいですが、自信のない方は安全な回り道もありますので御心配なく。

昼食には、岬かき揚げ丼を是非召し上がってください。余裕のある方は岬ガザミや香々地岬ひじきも美味しいです。

お土産には、長崎鼻の菜の花や向日葵の種を原料としたオイルはいかかでしょうか？少々宣伝も入ってしまいましたが、密な環境の場所も皆無ですので、息抜きにドライブがてらでも是非訪れてみていただきたいと思います。

最後になりますが、専用病床・重症病床はじめ最前線で診療を続けておられる先生方、スタッフの皆様には大変な苦労があると思います。お体をご自愛ください。

感謝を申し上げ、筆をおかせていただきます。

## 郡市等医師会だより



## 大分大学医学部医師会はなぜ必要か

大分大学医学部医師会長  
守山正胤

大分大学医学部医師会は、平成30年10月設立後、医学部事務棟3階の施設管理課の隣に事務局を置き、また、令和2年7月からは事務局長に大坂間雅晴さんを迎えて、少しずつ体制が整ってきています。一方、今般のCovid-19パンデミックによって、総会を開けない状態のままです。Covid-19は本文章を書いている時点（12月6日）で第三波の真っ最中で大分県下でも連日二桁の感染者が出ていますが、今冬さらに第四波も予測され医療体制の維持が懸念されます。これまでの経験に基づき、治療法も進歩していますが、患者数の増加がそれを打ち消している状況が続いています。RNAワクチンと抗体カクテルには期待していますが、今冬には間に合わずとにかく春までは患者を増やさない努力が必要です。また、我々も自分たちの果たすべき役割を果たし努力したいと思います。

さて、医学部医師会が設立後の2年間、医局の若い先生（ひょっとしたら教授の中からも）から問われるのは、①なぜ医学部医師会が必要なのか、また②自分にどのような具体的なメリットがあるのかという2点です。このことについては、本年の新年の挨拶（郡市医師会長の挨拶）でも書きましたが、国の医療政策の柱の一つである地域医療構想の実現の過程で地域の医療機関に機能分化が起こり、従来のようなすべての病院が総合病院の形態をとり続けることが困難になると想定されます。さらに、そこで働く医師像が変化すること（言い換えると地域で働く医師に求められる能力が従来の高度な専門領域だけでなく、generalな幅広い対応能力をも必要とされる）が避けられないと考えられます。そうなる専門医制度のサブスペの重要度にも変化が起こるかもしれません。そして、そのことはこれまで医局が育成してきた特定領域の専門家に加えて、将来の地域医療のニーズに応える人材育成の仕組みを作っていく能力を医局が身につける必要が出てくることを意味しています。つまり将来医局を単立つ若いドクターの就職先を確保し、医局の意義が失われることのないように機能を拡充していく必要があります。今後は地域の医療の現場でかかりつけ医との密接な連携がこれまで以上に必要不可欠なものとなり、医師会の一員としての役割を果たす必要が出てくるということだと思います。私が医学部医師会が必要だと考えたのは、このような将来の我が国のあり方の変化を踏まえて将来も大分県内で活躍できる医師を育成できるようにすること、そのための土台として医師会との連携が不可欠と考えたからです。したがって、若い医局員にとっては医師会入会が今すぐ具体的なメリットをもたらすことは小さいかもしれませんが、将来的には彼らが県内医療に不可欠な中核として生き残るためには必要だと理解してほしいと思います。私は、私の残りの任期（令和2年度末）までにこのことを多くの医師達に理解してもらうことが最大の使命と考えています。その上で令和3年度以降、本医師会がその重要な責務をはたしていただけることを強く期待しています。

## 郡市医師会だより

「野津町から臼杵市の  
地域包括ケア構築のお手伝い」

臼杵市医師会

岩田由加

私が居住、開業している野津町は、平成17年に臼杵市と合併しました。野津町は、大分県の民話の代表格「野津の吉四六さん」で有名な町で、田んぼと山、豊かな水に囲まれた農村地域であり「国指定天然記念物の風連鍾乳洞」や大友宗麟が豊後を治めていた時代に作られたとされている「磨崖クルス」「キリシタン地下礼拝堂」などの歴史的遺物がある「ユーモアと人情でつながり、ゆったりとした時がすごせるまち」です。

野津町の医師は、豊後大野市医師会に所属していましたので、私は弟の岩田卓が岩田医院の常勤となった折に豊後大野市医師会を退会し、平成29年1月に臼杵市医師会に入会しました。当時の会長である東保裕の介先生から「臼杵市医師会の理事になってもらえませんか？」と、ご連絡いただいた際には、「自分で理事の役目が務まるのであろうか？」と、お受けするのを考えていましたが、父の助言もあり、お受けすることとなりました。

平成30年6月27日の臼杵市医師会定時総会にて初めて理事に就任し、東保前会長及び諸理事の先生方のお力添えをいただき、今年度の役員改選にて2期目の理事就任となりました。

また、私は令和2年5月9日に父の岩田智雄が逝去したため、「医療法人社団栄仁会」の理事長に就任しました。「医療法人社団栄仁会」は、祖父の岩田栄が大正2年に岩田医院を開業以来、約100年の歴史を経て祖父、父ともに「地域密着型医療」をモットーに1日の休診もなく、24時間体制で微力ながら全科にわたり努力してきたことが基盤となっています。

父は、野津町の高齢化率、独居老人が全国平均値を大きく上回り急激に過疎化が進行し始めた平成6年に「医療と福祉の連携」の必要性を強く感じ、大分県で初めて診療所併設の通所リハビリテーション「岩田リハビリクリニック」を開設し、平成7年に私が院長に就任し現在に至っています。

私は父とその父を支えてきた母の背を見て育ち「一人ひとりを大切に安心と生きがいのある暮らし」の法人理念を念頭に置き、日々努力しているところです。

今後も、臼杵市医師会の理事としてまた、地域の方々の心の支えとなれるよう地域医療・地域包括ケア構築に取り組んでまいりますので、ご指導ご鞭撻くださいますようお願い申し上げます。

## 郡市医師会だより

## へき地巡回診療

津久見市医師会

小宅和俊

津久見市の西方、臼杵市に隣接した山間部に畑（はた）地区があります。

数年前の夏、その地区の住民の方から訪問診療の依頼を受けました。自院を出発し、臼津トンネル入り口の手前を左折、狭く曲がりくねった細い坂道を上って行きます。坂道は木々で覆われトンネルの様であり、左側は崖になっています。10分程上るとほぼ頂上に到着し急に視界が開け集落が見えました。蝉時雨の中、東側をみると津久見湾、セメント山、津久見市街地などが一望できる見事な景観です。（表紙の写真です）車窓から吹き込む風は高地のため市街地と比べ爽やかでした。集落は昭和の落ち着いた山村の雰囲気を残しており心が和みました。往復で1時間以上かかる訪問診療でしたが、印象深いものとなりました。

毎年11月は四浦半島の久保泊にある医師会立介護老人保健施設サテライトみなみヘインフルエンザの予防接種に行きます。網代から半島部へと国道を左折すると直ぐに長いトンネルがあります。トンネルを抜けると目前にリアス式海岸が広がります。冬風の強い日は波しぶきが打ち付ける海岸沿いの県道を進み、つくみイルカ島を過ぎると山間部の坂道に入ります。峠はトンネルとなっており、下り坂になると眼下に海に突き出した半島、漁村が広がります。サテライトみなみは廃校になった久保泊小学校の校舎を利用しています。目前には久保泊湾が広がり、海越しに急峻な山稜や鉾山が望める落ち着いた施設です。四浦半島の春は河津桜で賑わっていますが、冬の時期は人影もまばらです。こちらは往復で2時間程度かかる往診です。

津久見市全体が過疎地域ですが、特に山間部、半島部、離島部は深刻な少子高齢化、人口減少の問題を抱えています。これらの風光明媚で穏やかな地域が限界集落にならないことを願うばかりです。

津久見市医師会はへき地医療対策の一つとして、平成6年より四浦半島落ノ浦地区、無垢島、令和元年より四浦半島高浜地区に巡回診療を行っています。各地区に月2回、医師会員と医師会立病院の事務員が約2時間強の巡回診療を実施しています。

四浦地区の巡回診療の受診者数は平成6年度が220名、令和元年度は65名となっており、約7割減少しています。採算が取れる受診者数ではありませんが、過疎地域の重要な医療インフラと考えています。医療インフラは過疎地域の維持には欠かせないものです。

津久見市医師会は、過疎地の維持のためにへき地巡回診療をこれからも継続して行って参ります。

## 郡市医師会だより



## 在宅医療介護連携2020

中津市医師会

古川 信房

VUCAというキーワードがあります。V:Volatility（変動性）U:Uncertainty（不確実性）C:Complexity（複雑性）A:Ambiguity（曖昧性）先の未来は予測できません。21世紀は答えのない世界を生きる力が必要な時代と言われてきましたが、今回のコロナショックでそのことがまさに現実を帯び、2020年当初とは全く違った世界になってしまいました。グローバル化とは無縁と思われていた医療業界ですが、未知のウイルスは我々医療のみならず介護現場にも大きな影響を与え、医療崩壊と一部では医療機関の倒産も現実のものとなっています。直接的な触れ合い、密な関係性が地域医療や多職種連携におけるポイントの一つでしたが、感染対策のため、これからはリモート、バーチャル、アバターがこの現場にも持ち込まれてくるのでしょうか？変化に適応できるものが生き残るといわれてはいますが、このコロナをきっかけに将来を見据え持続可能なエコシステムを作り上げなければなりません。運に頼るのではなく、地域を見つめ、将来予測を立て、SDGsを作り上げていかなければならないのかもしれないかもしれません。そういった点ではSustainabilityがキーワードでもあり、またある意味プラスチックワードでもあります。

さて、中津市から医師会が委託を受け、在宅医療・介護連携の推進事業も概ね3年で土台作りが完成しました。初年度は、現状把握を行い道しるべを作り、2年目は地域に密着した相談センターを包括支援センターに設置（サブセンターと命名）、専門職が相談する役割を医師会が（センターと命名）担うことになりました。また、多職種の顔の見える連携として事例検討会に尽力しました。

3年目は看取りを中心にロジックツリーを作成し在宅医療・介護連携の作業を可視化し、参加者全員で共有しやすくしました。そして、それぞれの事業の評価指標と具体的な目標設定を行いました。

並行して、保健所、行政、包括支援センターやケアマネージャーの方々と共に医療と介護の連携シート（TCA）や入退院時情報共有シートの作成、ケアマネージャーの負担軽減のため、提出資料の簡素化を質を担保した上で行っていきました。3年間で行政・保健所・ほかの多くの職種の方々と信頼関係を築けたことは大きな財産となっております。

今年度より、医療と介護の連携シートや入退院時情報提供の実運用が始まり、在宅医療チーム形成・救急医療との連携が始まる予定です。コロナ騒動で一時すべての作業が停止していましたが、リモートや密の回避など工夫を凝らしながら、徐々に元のペースに戻ってきております。ICT導入を検討しておりますが、無用の長物とならぬよう、慎重に皆様方のご意見を伺いながら考えていく方針です。とりあえずはメディカルケアステーションで乗り切っていくつもりです。

いま、まさにコミュニティの力が試されています。この危機をチャンスに変えて、ウィズからアフターコロナを見据えて地域の医療福祉のあるべき姿を実現していきたいと考えています。

## 郡市医師会だより



## COVID-19 in 別府

別府市医師会

大澤直文

連日、COVID-19関連の話題が、ワイドショーでは最初のニュースとしてかなりの時間を割いて報道され、新聞も第一面に関連記事が必ずと言っていいほど登場しています。8月12日時点で沖縄は患者数が増え、医療も逼迫してきているようです。2週間前の4連休からGo Toトラベルが開始されたことが影響していないとは言えないと思われます。

別府は観光に関することを生業としている人がかなりの割合でいます。別府で開業して20年足らずですが、休日、更には連休ともなると、クリニック前の道路が他県ナンバーの車で渋滞するのを苦々しく思ったりしていましたが、今回ほど人や車の量が減ってしまったのは初めてのことで驚いています。7月の4連休中はGo Toのおかげかホテルの窓にも明かりが少し戻ってきて別府市民としては安堵しました。医師という立場での判断としては、人の動きは最小限にするべきと思いますが、観光関係の衰退をみると複雑です。

観光業界の経済的逼迫により、パート・アルバイトの人達は休職やひどい場合は失業ということになり、自宅に籠るようになり、運動不足、間食の摂取で体重増加、糖尿病患者に至っては病状が悪化する人が増えています。老人は、メディアで外出を控えるよう訴えているのを真面目に守り、結果として下肢筋力低下につながっています。最近の診察時の指導は熱中症に注意しつつ外出を促すことに努めています。

最高気温が40℃を超えるような、異常気象の現代において、昨今は熱中症とCOVID-19の鑑別が問題となっていますが、冬場のインフルエンザとCOVID-19の鑑別はさらに難しいものとなりそうです。ウイルス干渉など期待はできないでしょうし、たとえあってもどちらかの疾患がゼロになることはありません。

今回、別府市医師会は市、保健所の協力を得てPCRセンターを設置しました。医師会内にも協力を求めた結果、思いの外、多くの医師、看護師が手を挙げ、また事務方の努力もあり、事が為せました。冬場は発熱外来などの検討も必要となるかもしれません。さすればPCRセンターの設置の時のノウハウが生きてくると思われます。いずれにせよ、市、保健所、医師会の三者の協力が必要で、言わばこちらの三密であたってCOVID-19と対峙することが大切であると考えられます。個人的には最後はインフルエンザに準ずるような形で落ち着くのではと思っていますが、兎にも角にも通常の医療体制に戻れるよう収束、いや終息して頂きたいものです。

## 郡市医師会だより



## 大分市医師会半年間のご報告

大分市医師会

安武千恵

新型コロナウイルス感染症の拡大を防ぐために、政府が4月7日に発した緊急事態宣言が5月25日に解除され、「新しい生活様式」を心がけた日常生活が始まりました。しかし経済活動の再開と人の動きの活発化で、6月末から再び感染者数が増加し始め、7月に入ると第2波の到来を思わせるように首都圏以外でも毎日報告されています。大分では4月21日を最後にその後の感染者は確認されていませんが、今後にも備え各地域の状況に応じた対策が求められています。

今年の半年間は本当に変化の大きな年でした。大分市医師会では1月25日に「大分市医師会立アルメイダ病院開院50周年記念式典」を病院職員の協力のもと開催しました。1969年（昭和44年）に開放型医療施設として開設された100床の医師会立病院も2008年（平成20年）に新病院が完成し406床となり、地域医療に貢献しています。式典は今振り返りますと究極の「3密」状態でしたが、まだ感染が全国に拡大する前でしたので無事に終えることが出来ました。次に新型コロナウイルス感染症関連では、大分市連合医師会として行政と協力し「大分市PCRステーション」を開設して、5月18日から運用が開始されました。平日午後にもかかわらず会員の先生方に出動いただき、順調に稼働しています。新規感染者が急増している現状で、このセンターの役割は大きいと思います。医師会の体制の変化として、杉村忠彦会長が6月18日の第13回大分市医師会定時社員総会をもってご退任なさいました。先生は昭和59年に大分市医師会理事に就任され、平成16年4月からの16年間は医師会長として、医師会を率いてくださいました。温かなお心で見守り、時には厳しくご指導いただきましたことに心から感謝いたしております。これからは山本貴弘新会長と植山茂弘・石和俊新副会長の新体制で大分市医師会の運営を行ってまいります。

7月3日熊本に甚大な被害をもたらした「令和2年7月豪雨」は、5日大分にも大災害を発生させました。災害時の避難と感染症対策をどう備えていくか、考えねばならない問題は山積みです。地域医療を守るために会員の先生方や他職種の方々と連携し、活動してまいります。

新しい執行部となりましたが、今後とも宜しくご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

## 郡市医師会だより



## 宇佐平野には

宇佐市医師会

時枝正史

わが家のバックヤードから宇佐平野の広大な田園風景を眺めることができます。運動不足の解消に時々散歩に出かけますが、農道を歩くと四季折々の彩を感じます。田畑には、冬は焼酎の原料になる大麦が、夏には「ヒノヒカリ」などの米が作られます。麦畑は5月頃、<sup>ばくしゅう</sup>麦秋と呼ばれ一面黄金色に変わります。麦が刈られたあとは一旦耕され、6～7月には田植えの時期を迎えます。田んぼに水が入ると、その晩から一斉にカエルが鳴き出します。私はカエルがキライですが、この合唱が始まると大好きな夏が近づくのを実感します。

そんな道を少々歩いていくと、一見奇妙な形をした建造物があります。<sup>えんたいごう</sup>掩体壕（表紙の写真）であります。軍用機を格納する施設で、敵の空襲から守るために土を被せ、草木が生え、空から見つけにくい造りになっています。

宇佐には第二次大戦中、海軍航空隊基地がありました。昭和14年に開設され、当初は訓練するだけの飛行場でしたが、戦況が悪くなっていくと昭和20年には神風特別攻撃隊の基地となりました。この地からも南方の海へ出撃して行き、81機、特攻隊員154名の尊い命が失われています。当院の患者さんで当時特攻隊に配属されていた方がいました。「ほんとなら16で死んじゃった。この年まで生きてんやから何んも不満はない」と、病気が見つかるたびに、そんな風に話されていました。もう少し戦争が長引いていたら、特攻命令が出されていたであろうとのことでした。掩体壕は今も10基ほど残っており、一つは史跡公園として宇佐市で管理されていますが、その他は民家の農機具置き場などに利用されています。

戦争の跡形は他にも見られます。掩体壕の近くを走る市道・フラワーロード2号線は当時の滑走路です。今ではきれいに舗装されていますが、その北の端にJR日豊本線を乗り越える跨線橋があり、車で坂を上がっていくと戦闘機が離陸するのを彷彿させます。

また宇佐は米軍機から何度も攻撃を受けています。通称「爆弾池」と言って、爆弾が落とされた大きな穴に水が溜まり、池のようにになっている窪地が今も田んぼの中に残されています。当時を体験された方の話では、「終戦間際にはしょっちゅう空襲があった。家にいても空襲警報があるとすぐに<sup>ぼうくうごう</sup>防空壕に入らなければならない。しばらくするとグラマン（戦闘機）やB-29（爆撃機）がグォーンと音を立てて近づいて来る。爆弾を落とされるとものすごい地響きがして、あとは体育館が

すっぽり入るくらいの穴が開いていた。よう生きとったなと思う」と話されていました。

そうした戦争体験の話聞く機会が最近では少なくなっています。忘れられていく戦争の悲劇を次世代に伝えていこうと、宇佐市では「城井1号掩体壕」や「爆弾池」などを史跡として整備しています。また、映画「永遠の0(ゼロ)」で実際に使われた実物大の零戦模型が、宇佐市平和資料館に展示されています。

いま世界中で新たな敵と先の見えない戦いを強いられています。戦時中のように食べるものがなかったり、爆弾が降ってきたりするわけではありませんが、いつ“空襲警報”が鳴るのかヒヤヒヤするような予感があります。しかし先輩方があの苦難を乗り越えてきたように、日本人は勤勉でいざとなれば辛抱強いので、なんとか乗り切っていけるのではないのでしょうか。早く和平条約を結べるとよいのですが。私自身は、免疫力アップのために、睡眠・栄養・体力、そして補中益気湯を飲んで日々空襲に備えております。



「城井1号掩体壕」



宇佐海軍航空隊滑走路跡地



「爆弾池」



映画「永遠のゼロ」で使われた零戦模型

## 郡市医師会だより



## インフルエンザ発生動向週報 (日田市医師会版)について

日田市医師会

長野 浩志

インフルエンザの流行期には、大分県は二次医療圏毎にその発生動向週報（以下、大分県版と略）を毎週発表しています。大分県版での定点あたり患者数は、例えば西部圏域では指定された5医療機関からインフルエンザで受診した週間患者数を報告してもらい、その平均を出した数で、その数に応じて「流行入り」「注意報」「警報」など、警戒の度合いを知ることが出来る指標になっています。

しかし、病院や高齢者施設での集団感染対策に役立てるには、流行の実態がより詳細により具体的に把握できるような発生動向調査が必要です。

そこで、日田市医師会では、医師会加入の58医療機関全てに協力してもらい、毎週インフルエンザで受診した患者の数を性別、年代別、型別、ワクチン接種の有無別に報告してもらい、独自のインフルエンザ発生動向週報（以下、医師会版と略）を作成し、それを日田市医師会のホームページ上に毎週掲載し、誰でも閲覧できるようにしています。

医師会版では、市内での週間インフルエンザ発生数や年代別発生数分かるので、病院や高齢者施設は、その発生状況を参考に面会制限の実施など集団感染対策に役立てることが出来ます。

また、医師会版の調査は例年10月から翌年の5月までの期間行っているため、その年の日田市でのインフルエンザ発生状況を詳細に把握することが出来ます。例えば、平成29年の調査では、

- ① 日田市のインフルエンザ罹患総数は6,311名で、市民のインフルエンザ罹患率は9.6%でした。ちなみに、会員病医院に対して独自に行った調査では、医師会に所属する54医療機関の全医療従事者（医師、看護師、事務員など）の罹患率は6.9%でした。医療従事者の方が市民より罹患率が低いことは、一見奇異に思えますが、これは、医療従事者のワクチン接種率が90%以上であることやここ数年毎年開催しているインフルエンザ集団感染対策講演会に参加し、感染予防に対する見識が高まった為だと思えます。
- ② 0～9才の年代が最も罹患者が多く、その数は1,916人で、この年代の罹患率は35%と最も高い割合でした。逆に、罹患率の最も少ない年代は80歳以上で3.3%でした。
- ③ 0～19才までの年代の罹患者が3,061人で、日田市の罹患者のほぼ50%を占めていました。このことから、保育園・幼稚園や小中学校に在籍する子供に対するインフルエンザ対策が必要と思われました。そこで、平成30年9月に医師会主催で開催した「地域ぐるみで取り組むインフルエンザ集団感染対策講演会」に、保育園・幼稚園の園長さんや小中学校の校長先生に参加を呼びかけました。講演会には318名の参加があり、関心の高さが伺えました。

このような取り組みを通して、近い将来発生するであろう新型インフルエンザに備えておきたいと思えます。

## 九州の軽井沢より

玖珠郡医師会

友 成 一 英

今年の冬は、雪がほとんど降らず、梅が咲いたかと、思う間もなく、水仙、木蓮、辛夷、連翹、山茶花、菜の花、雪柳、桜・・・と、同時に咲き誇っております。例年ですと4月に咲く、チューリップも加わり、玖珠の3月は、百花繚乱です。

そうした中、人々のささやかな春の楽しみを奪う、未知のウイルス「新型コロナ」が出現、蔓延し、日々の生活に支障をきたす様になってきました。

玖珠郡は人口減、高齢化が喫緊の課題ですが、コロナの問題はさらに郡全体を覆い、観光業のみならず日常生活にも人々の心にまで暗い影を落としているように思えます。

先日、中学生の同窓会の案内があり平日開催。連絡してみると、ほとんどが退職しており悠々自適の生活で平日希望の方が多い、との事。わが身を振り返ってみると、昨年来腰痛を患い単独での診療に若干の不安を覚えていたところでした改めて年齢を実感したところでした。

さて、当医師会も近年、高齢化会員減少が進み、存続さえ危ぶまれている状況であります。地域包括支援事業、ICTの導入、EMIS等・・・医師会としての役割を果たし、地域の皆様に安心していただけるよう医療機関での連携を取り、微力ながら努力したいと思いつつ、そろそろ若手の台頭を期待し、バトンタッチしたいと願う今日この頃です。

来年の今頃は、平常心で、美しい桜、花々を愛でられますよう・・・、



## 郡市医師会だより



## 「たけたる竹田」を目指して

竹田市医師会

理事 安永正剛

竹田市は、滝廉太郎の「荒城の月」の題材にもなった岡城址をいただく風情のある城下町である。また、祖母・傾、久住、阿蘇山系の豊かな自然に染み込んだ伏流水により、市内各所に清らかな湧水のある名水のふるさとでもある。

この自然豊かな竹田市にも少子高齢化の波が押し寄せ、高齢化率（65歳以上の人口に占める割合）は47.2%で大分県内第2位である。内閣府の推計した我が国の2065年時点の高齢化率は38.4%であり、竹田市は優に45年以上先の超高齢化社会を歩んでいることになる。

高齢者が住み慣れた地域で自分らしい人生を全うできる社会を目指して「地域の包括的な支援・サービス提供体制（地域包括ケアシステム）」の整備が進められている。しかし市の人口減少に伴う介護職員さらには医療職員の不足等のソフト面を含め、多くの課題が山積している。

医療・介護サービスの質の向上や効率的な提供を実現するため、高齢者の情報をICTを活用して医療と介護の間で迅速に共有するネットワークを構築し、個々の高齢者を見守る、顔のみえる多職種チームを形成しようと現在行政と共に計画している。

私の患者もほとんどが80歳以上である。診療しながら感じるのは、高齢者が元気であることである。そしてなにより、高齢者からその元気を日々分けてもらっている。

そんな元気はつらつの高齢者から、どうすれば長生きが出来るかを学ぶ、超高齢化社会の竹田では案外身近に少子高齢化問題の解決策があるのかもしれない。

「地震の時は竹藪に逃げろ」という言葉がある。竹は根を広く張っているため地割れが少なく、避難場所としてすぐれているという経験からいわれている。竹田も、医療と介護、さらには高齢者も含めた地域住民がお互いに手を繋ぎ、強い地盤（ネットワーク）を築き少子高齢化社会に挑んでいきたい。

昨今我が医師会は種々の問題を抱えている。竹は節（ふし）があるからこそ、雪にも負けない強さを持つ。今回の苦を多くの節にかえ、強い竹田市医師会になりたい。

長寿の高齢者も安心して暮らせる「長けたる」竹田、竹のように社会全体が根を張り協力する「竹たる」竹田、この二つの「たけたる竹田」の実現のために竹田市医師会が尽力出来たらと願う。